

第一回 猿橋物語

第一部 猿橋物語

<10>

深い谷間。そこに脚のない橋を架ける。その名、猿橋。同市、追分町の祖頭、尾股敏吉さん。昭和二十四年の架け替えに活躍した二人の老仕事師のエピソードが残っている。

「私なんか、ジイさんから見れば小僧っ子なしたわ」。同市、追分町の祖頭、尾股敏吉さん。昭和二十四年の架け替えに活躍した二人の老仕事師のエピソードが残っている。

滝沢吉五郎さん。お隣の八王子市本町三丁目生まれ。つい先年、九十九歳の高齢で「くまな」が、現役の時は、三丁目の頭（かしら）と呼ばれ、サーカスの小屋掛けや、神社仏閣修理の足場作りはお手のものだった。

吉五郎さんは、ハギのくまな、細い針金を使って足場のヒナ型を作り、若い者に丸太の組み立て方を特訓した。

それでも、いざ現場にはいると、予想以上の難工事だったらしい。「平場（平地）と違ってね、丸太一本渡すにもロープでつり、何人もの手でたぐり寄せする。そりゃまあ、四、五日は火事場のような騒ぎだったわ」。

架け替えの記録

架け替え工事の元請け人は地元猿橋の親方で、当時八王子市方町にいた別の組頭に相談を持ち込んだが、「そりゃ、吉五郎さんでもなきゃ、できないわ」。

鷲の三丁目の頭、ヒナ型を作り特訓

予想超す難工事



その後、尾股さんは、そんな仕事を勝った。ただ、「鷲（うし）の仕事師の世界を」ある鷲の記、みち、神社仏閣の「くまな」として、昭和四十七年、ふたたび鷲の記（グループ刊）という二冊の本をまとめた。鷲橋架け替えの苦労話を紹介する中で、吉五郎さんを、足場の神様、と書いたら、最近、ひょんなことから吉五郎さん、お隣の八王子市本町三丁目生まれ。つい先年、九十九歳の高齢で「くまな」が、現役の時は、三丁目の頭（かしら）と呼ばれ、サーカスの小屋掛けや、神社仏閣修理の足場作りはお手のものだった。

吉五郎さんの作った足場のヒナ型を懐かしそうに見る尾股さん